

広大から海外へ留学している若手の日記

米国ミシガン大学留学便り

坂本 直也 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 医学分野 分子病理学 特任助教 (当時)

私は現在米国ミシガン州アナーバーのミシガン大学に留学しています。ミシガン大学はアナーバーという人口約10万人の都市にあり、豊かな自然に囲まれています。近郊の大都市としては、東方60キロにデトロイト、西方350キロにシカゴが位置しておりますが、非常に治安もよく、充実した留学生生活を過ごすことができています。

研究室を主宰するEric R. Fearon先生は、大腸癌の発生・進展に関わる遺伝子研究の権威であり、1990年にジョーンズ・ホプキンス大学のBart Vogelstein教授とともに大腸癌における多段階発癌の概念を発表された他、以前留学されていた本学消化器外科 檜井孝夫先生とともに腸上皮細胞特異的ホメオボックス転写因子であるCDX2の機能解析も行ってこられました。現在の私の研究テーマは、正常結腸及び大腸癌におけるCdx 2発現消失に関する解析です。私はマウス実験の経験がなく、当初は大変苦労しましたが、ラボの同僚やマウスルームのスタッフに助けをもらいながら、研究を進める事が出来ています。現在のラボのポストドクでは私は唯一のM.D.ですが、医師、病理医として癌という病気を実際に見たことがある、その形態像を詳細に説明することができる、という経験、スキルが、いかに研究領域でアドバンテージがあるかということに改めて実感しています。また各々のラボメンバーに研究者として異なる背景があり、それぞれが持つ高いスペシャリティーを少しでも吸収すべく、毎日のようにディスカッションしながら、和気あいあいと研究できる環境が非常に新鮮で、刺激的でもあります。しかしながら、同時にこの一年間で二人のラボメンバーの契約が打ち切られるという厳しい現実も目の当たりにしました。Fearon先生と顔を合わすと、間髪入れず“What's new?”とたずねられ、ラボミーティングでの厳しい質問、膨大な量の実験プランの提案を頂くにつけて、成果至上主義に裏打ちされる厳しい競争社会のプレッシャーをひしひしと感しますが、良い意味での『刺激』を受けながら充実した日々を過ごしています。

最後になりましたが、このような貴重な留学の機会を与えていただきました安井 弥教授ならびに広島大学の諸先生方に心より御礼申し上げます。



私の所属するBSRB (Biomedical Science Research Building) 外観